

# 真言宗智山派

## 「女性教師全数アンケート調査」

### 分析研究報告（データ編）

安井光洋

はじめに

本稿は智山伝法院「仏教とジェンダー研究会」が令和5年に行った「女性教師全数アンケート調査」（女性教師アンケート）の集計結果のうち、問1より問20までの回答を分析したものである。しかし、紙幅の都合上すべての設問について取り上げることは不可能であるため、特筆すべき結果の出ている設問を選んで分析を行った。なお記述式の自由回答である問21から問24については、本稿と同じく『現代密教』第34号に所収の田村宗英「真言宗智山派『女性教師全数アンケート調査』分析研究報告（自由回答編）」で分析している。また全体的なアンケートの集計結果<sup>①</sup>についても『現代密教』同号に掲載している。

本稿では分析にあたり男女差を比較するため、真言宗智山派で令和3年に実施した『真言宗智山派総合調査』（総合調査）のうち、「教師表」の集計結果の中から「男性」と「女性」という条件で抽出したデータを使用した。

しかし、この比較には大きな問題が一つある。それは総合調査の男性回答者数が2,320人であるのに対し、女性教師アンケートの回答者数は95人<sup>②</sup>とサンプル数に大きな差が生じていることである。特に女性教師アンケートのサンプル数については100以下であるため、設問によってはそこに示される差が有意差であるか否かの判別が困難な例が少なからず見受けられる<sup>③</sup>。またサンプル数100以下の結果をパーセンテージ換算すると実数より数値が上がることになり、読者へ与える印象に対して

unnecessary操作を加えてしまいかねない。そのため、女性教師アンケートの集計結果についてはパーセンテージと実数を併記した。以下、数字の後に%の表記がないものが実数で、パーセンテージはそれに続いて括弧内に表記した。

## 問1-B. 僧階

まずは女性教師の僧階について分析していく。今回の結果のうち、回答の多かった上位5つは以下の通りである（5位は同率のため併記）。

中僧都20（21.1%） 権少僧都15（15.8%） 権中僧都9（9.5%）  
 律師9（9.5%） 権大僧都8（8.4%） 少僧都8（8.4%）

以上のように中僧都がもっとも多い回答となっているが、これを僧階取得の学処という観点から分析すると、『総合調査』では女性の学処は「智山専修学院」45.8%が最多である。「大正大学」20.8%はそれに次ぐ2位であるが、1位の半数以下である<sup>4)</sup>。そして、智山派の規定では専修学院卒業時点で取得できる僧階は「律師」であり、卒業時点で「中僧都」が取得できるのは大正大学のみである。このことから女性教師が最初に取得する僧階は律師がもっとも多いことになる。以上を踏まえることで、上記の中僧都20名のうち何名かは権少僧都以下の僧階から女性教師としてのキャリアをスタートさせ、そこから段々と位を挙げて現在の僧階に至ったというキャリア形成の過程を見てとることができる。

上記の結果でもう一つ特筆すべき点として、僧階の上位5つに「僧正」が入っていないことが挙げられる。今回の結果では女性教師で僧正と回答したのは「中僧正」1（1.1%）と「権少僧正」5（5.3%）の6人（6.4%）のみである。これに対して『総合調査』の男性の僧階上位5つを参照すると以下の通りになる。

権少僧正14.4% 中僧都14.2% 権大僧都9.9% 少僧正7.8%

大僧都7.6%

男性教師では権少僧正がもっとも多く、僅差で中僧都がそれに続いている。これを分析すると男性教師のキャリア志向は僧正位を得ること、いわゆる「6級昇補」が目標とされていることがわかる。そして3位の権大僧都9.9%と5位の大僧都7.6%の多くはそのようなキャリア形成の途上にある「6級昇補希望者」であると見ることができよう。

以上のように、女性教師と男性教師のキャリア志向については明確な差が出ており、女性教師は僧正位を目指すものが少なく、他方男性教師は6級昇補に対するモチベーションが高いことがわかった。女性教師の6級昇補へのモチベーションについては問12の項で改めて検討する。

また、女性教師については「律師」のように低い僧階が上位に入っているのに対し、男性教師の上位5つの中では中僧都がもっとも低い位である点も対照的である。

## 問2 現在の仕事

現在の仕事について尋ねる設問では「自坊の僧侶」56 (58.9%) が最多であった。それに次いで多いのが「寺庭婦人」28 (29.5%)、「自坊の僧侶以外の仕事」24 (25.3%) である。また、「その他」7 (7.4%) のうち2人 (2.1%) が「他寺院の僧侶」と記述回答している<sup>5)</sup>。これについて総合調査を参照すると「他寺院職員」と回答した男性教師は24.7%であり、兼業の職種としては最多である。このことから男性教師と比べると、自坊以外の寺院で働く女性教師は極端に少ないことがわかる。

## 問3 自分の収入のみで生計を立てているか

この設問の回答は「できている」40 (42.1%)、「できていない」52 (54.7%)、無回答3 (3.2%) という結果であった。このことから自分の収入のみで生計を立てている女性教師は半数以下であることがわかった。

また「できていない」52 (54.7%) のうち3名が、続く問3-2の世帯の

生活基盤について尋ねる設問の「その他」で「年金」と記述回答している。

#### 問4 配偶者の有無

女性教師の婚姻状況については配偶者が「いる」51（53.7%）、「いない」31（32.6%）、「以前はいた」12（12.6%）という結果であった。これらのうち「いない」と「以前はいた」を合わせると43人（45.2%）となるので女性教師の半数近くが現在独身であるということになる。これを男性教師と比較すると、『総合調査』では以下の結果となっている。

いる72.5% いない20.3% 以前はいた4.4%

以上のように、男性教師の7割以上は配偶者がおり、独身者の割合は24.7%と女性教師より低い。

また、配偶者が「いる」と答えた女性教師51人のうち、配偶者の職業が「智山派教師の専業」と答えたのは30人（58.8%）であった。これについては女性教師が僧階取得してから智山派教師と結婚したケースと、智山派教師と結婚してから僧階取得したケースの2種の可能性が考えられる。

#### 問5 出身

#### 問6 教師になろうとした動機

まず女性教師の出身については「寺院」63（66.3%）、「在家」32（33.7%）という結果であった。男性教師の出身は『総合調査』によれば「寺院」78.1%、「在家」20.8%であるので、女性教師の方が在家出身者がやや多いことになる。

また教師になろうとした動機の上位5つは以下の結果となった。（複数回答）

寺院の後継53 (55.8%) 親族が僧侶42 (44.2%)  
仏教に興味を持った33 (34.7%) 自分の修行のため22 (23.2%)  
住職・副住職(夫)の手助け19 (20%)

上記の他に「その他」という回答が5人(5.3%)いたが、そのうち2人が記述回答をしており、その内容はそれぞれ「寺院に生を受け自然の流れでした」、「世の中にゲンメツを感じた。」(原文ママ。以下、記述回答の文面はすべて原文ママ。)というものであった。

#### 問8 現在の師僧との関係

この設問の回答上位5つは以下の通りである。

実親(養父母も含む) 42 (44.2%) その他17 (17.9%)  
配偶者(夫) 16 (16.8%) 法類10 (10.5%) 無回答5 (5.3%)

このうち2番目に多かった「その他」であるが、その記述回答の例を挙げると「師始めは山伏であったが老齢の為、遊びに来ていた現在の師僧がかわりに教えようとなった。それで成田山に世話してくれた。」、「息子(R4に師僧替えしてます)」、「大学での指導者と学生」、「自分自身の諸々相談をしていた方」、「兄」、「友人の姉が尼僧、その方の仲介で御縁を頂く」、「上司」という内容であった。

また3番目に多い「配偶者(夫)」については3種のケースが考えられる。1つ目のケースはすでに僧階を取得済みの女性教師が智山派の男性教師と結婚し、さらに師僧を夫に変更したケースである。2つ目は男性教師と結婚した女性が、結婚後に夫を師僧として僧階取得するというものである。そして、3つ目は自分の師僧と僧階取得後に結婚するケースである。

## 問9 教師に補命された年齢

### 問10 加行を履修した年齢

この設問の回答についても男性教師と比較を行う。まず教師に補命された年齢に関する女性教師の回答は以下の通りである。

19歳以下2（2.1%） 20~22歳21（22.1%） 23~29歳28（29.5%）  
30~39歳12（12.6%） 40~49歳21（22.1%） 50~59歳8（8.4%）  
60歳以上2（2.1%） 無回答1（1.1%）

次に男性教師の回答を挙げる。なお年齢幅の設定は女性教師と若干異なっている。

19歳以下6.2% 20~22歳38.3% 23~29歳37.6% 30~39歳10.6%  
40~59歳4.8% 60歳以上1.1% 無回答1.3%

以上を比較すると女性教師は「23~29歳」という大学卒業後の年代での補命がもっとも多いのに対し、男性教師は「20~22歳」という年代での補命がもっとも多いため、大学卒業時点での補命が多いと考えられる。

また女性教師は「40~49歳」と「50~59歳」での補命の割合が30.5%となり、男性の「40~59歳」4.8%よりかなり高いことがわかる。この要因の一つとして住職である夫の病気や死別が考えられる。それについては別稿の「真言宗智山派『女性教師全数アンケート』集計結果報告」問7で実際の記述回答を挙げている。

さらに、このような男女間での年齢ごとのヴォリュームゾーンの相違は加行の履修年齢を比較するとより顕著である。以下に女性教師と男性教師それぞれの加行履修年齢の上位3つを挙げる。

女性教師

23~29歳22（23.2%） 40~49歳20（21.1%） 20~22歳18（18.9%）

男性教師

19~22歳56.2% 23~29歳22.4% 18歳以下9%

これを見ると、男性教師の半数以上が22歳までに加行を履修しているのに対し、女性教師はそれと比べて加行を履修する平均年齢が高いことがわかる。以上を踏まえると、女性は男性より相対的に教師としてのキャリアのスタートが遅いということになる。これについては今後女性教師のキャリア形成について考える上で、前述の記問1-Bで取り上げた女性教師の多くが中僧都以下の階位にとどまっている問題と併せて検討すべき課題である。

問11 練行の履修状況

この設問についても回答に男女間で明確な差が見られたため、以下に両者の結果を挙げる。

女性教師

履修した26 (27.4%) 履修していない69 (72.6%)

男性教師<sup>(6)</sup>

履修した68.5% 履修していない30.8%

練行の履修状況については男女で対照的であり、「履修した」と「履修していない」の割合がほぼ逆転している。また「履修していない」を選択した回答者69人にその理由を尋ねたところ「時間的理由」44 (63.8%) が最多で、「必要性を感じない」19 (27.5%)、「その他」16 (23.2%) がそれに続く。

「その他」の記述内容としては「年老いた両親、子供達を見る人も居ず無理」、「高齢になり体調がすぐれず」、「主人の闘病の為」、「修行の意

志あるも膝、腰に支障があるため」、「寺をあげられない、育児の為」といった自身や家族の健康状態の悪化、高齢化、育児などの理由のほか、「剃髪が必要があるから」、「再度、剃髪することに抵抗があるため」、「不必要な剃髪の為」というように「剃髪」がハードルとなっているケースも見受けられた。

## 問12 六級昇補を希望するか

七級（大僧都）以下の女性教師（80人）の六級昇補への希望の有無については「希望する」28（35.0%）、「希望しない」47（58.8%）と「希望しない」が上回る結果となった。

また、「希望する理由」については「個人の研鑽」22（78.6%）がもっとも多く、「法流の伝承」11（39.3%）、「その他」8（28.6%）がそれに続いた。「その他」の記述回答は「一人の為、法流をつぐ者が要る。一代で終わりとくはない。」、「住職の要件の一つとして」、「自分自身、どこまで行く事が出来るか挑戦してみる」、「師僧からの要請」、「寺格の護持」、「要請はないが、檀信徒と寺院興隆の為」といった理由が見られた。

他方、「希望しない理由」については「昇補に興味がない」32（68.1%）、「時間的理由」18（38.3%）、「その他」12（25.5%）という結果となった。「その他」の内容については「年令と他に子供が全部する様になった」、「現在は子供が僧侶として寺を守っている、私には不要である」、「必要性を感じないが個人の研鑽としては希望が無いわけではない。自信がないし、子育ては終わったが、寺庭婦人の任務を思うと時間的にも遠慮がある。」、「まだ決めかねている」、「高齢」、「権律師より昇補不可の為（27条）」、「年令的理由」、「年令的に…」という理由が挙げられていた。

## 問13 現在の僧侶としての主な活動内容

この設問の回答については「自坊の葬儀・法事・法要」39（41.1%）が最多であったが、それに次ぐ回答は「無回答」16（16.8%）、「その他」13（13.7%）という結果であった。これについて「無回答」であった16

人がどのような理由でこの設問に答えなかったのかは定かではない。しかし、「その他」と併せて3割以上がこちらの提示した選択肢の中から選ばなかったという事実は、選択肢の設定方法に問題があったと考えるべきだろう。これについては今後の課題としたい。

また「その他」の記述回答では2人が「助法」と記述していた。このことから女性教師の役職と収入の関係について「他寺職員」の他に、「自坊はあるが主たる収入源は他寺の助法」というケースを想定する必要がある。

#### 問14 現在自分が希望する活動を行えているか

この設問の結果は「行えている」47 (49.5%)、「行えていない」32 (33.7%)、「僧侶として希望する活動は何もない」14 (14.7%)、無回答2 (2.1%)となった。

また希望する活動を行えていない理由を尋ねる設問では6人 (18.8%)が「その他」と回答し、その具体的な内容としては「全体的に時間に余裕がない」、「勤務先寺院に休日があほほない」、「壇務に時間をとり過ぎている」といった時間的要因や「準備不足、実行力不足」、「研鑽がたりない」といった能力的要因のほか、「自坊がないので、主体的な拠点がないと感じている。」という場所的要因が挙げられていた。

さらに希望する活動が「行えていない」と回答した32人に本来希望している活動(複数回答)について尋ねたところ「自坊の葬儀・法事・法要」19 (59.4%)、「自坊の催し物(寺子屋、阿字観、写経、お祭りなど)」19 (59.4%)、「自坊の事務・会計」10 (31.3%)というように自坊での活動に回答が集中した。また「その他」7 (21.9%)では「寺院の社会的活動」、「境内の作務、美化、事務関係の整理等」、「布教」、「自身の修習。様々な場所で仏法を紹介して、多くの人に役立ててもらおうこと。」、「寺カフェ」といった記述回答が得られた。

### 問15 集まりへの参加状況

宗派や教区、青年会などの催しへの参加状況を尋ねる設問では33人（34.7%）が「何も参加していない」と回答しており、このことから今回アンケートに回答した女性教師の3割以上が何の催しにも参加していないことが明らかになった。これは女性教師の宗内、教区内での立場や、他教師との関係構築について考える上で重要な意味を持つ結果であると考えられる。またそれと付随して、集まりに参加していない理由を尋ねる設問の「開催の連絡が届いていない」2（6.1%）、「参加を認められていない」2（6.1%）という回答についても今後検討が必要であろう。

同じく参加していない理由のうち、「その他」12（36.4%）については「一切、息子にまかせている」、「コロナ禍」、「住職が参加しているから」、「健康上」、「高齢」、「寺院の留守番がない」、「教師として活動していない為」、「遠方に居住しているため参加が難しい」といったものの他に、「師僧がなくなってから数年たつ。僧籍はくだつとまで言われて困っている。在家出身で僧社会がわからない。」という回答もあった。これについても上記と同様「女性教師の他教師との関係構築と孤立化」という観点から検討されるべき問題であり、そのためには今回のアンケートのような量的調査だけではなく、実際に聞き取りを行いその内容を分析する質的調査の手法も用いて調査を行う必要がある。

### 問17 宗派が提供する研鑽の機会としてどのような内容を希望するか

この設問について回答の多かった上位5つは以下の通りである。

特になし18（18.9%） 葬儀・法事に関する内容15（15.8%）  
仏教の教えに関する内容13（13.7%） 社会にむけた活動（悩み事相談、ボランティアなど）に関する内容12（12.6%） 無回答11（11.6%）

「特になし」と「無回答」が全体の3割を占めている点は大きな問題

である。これについては先述の「集まりへの参加状況」と併せて検討し、女性教師のもとへ開催の情報が適切に届き、参加を希望する者が障害なく参加できる環境を整備する必要がある。

また「その他」5 (5.3%)の中には「色々と工夫され提供されていると思う。まずは住職に行ってもらいたいと思うし、本山や東京では私には遠方(行きづらい)だと感じているので希望は無い」という回答の他に、「尼僧と僧侶、分け隔て無いディスカッション。①～⑧総て(筆者注:問17の回答の選択肢のこと)を必要とする中で、特に尼僧の立場を主張するのではなく、壁を無くした仏道への話し合いや、協調性を見い出す為の話し合い、宗派の中での交流」という積極的な提案も見られた。

## 問20 頭髪について

頭髪に関する設問では「それ以外」51 (53.7%) がもっとも多く、それ以下は「剃髪」18 (18.9%)、「丸刈り」12 (12.6%)、「耳にかからない程度の短髪」12 (12.6%) という結果であった。このことから「剃髪」と「丸刈り」のいわゆる「坊主頭」で生活している女性教師は全体の3割程度であることがわかった。

また、その2つの選択肢を選んだ30人のうち、日常生活でウィッグ・かつらを使用しているのは9名(全体の9.5%)であった。

## まとめ

以上、女性教師アンケートの間1から問20までの結果のうち、特筆すべきものを選び分析を行った。その中で明らかになった問題として、何よりもまず教師のキャリア形成における男女間での格差が挙げられる。これについては子弟育成という観点から考えれば、宗派の未来にとって極めて重要な意味を持つ問題である。そのため女性教師が性別を理由に六級昇補をためらうことがなく、阿闍梨として次の世代への法脈を繋いでいけるよう環境を整える必要がある。さらに、宗内や教区内での他教師との関係構築についても検討すべきであることが明らかになった。

## 真言宗智山派「女性教師全数アンケート調査」分析研究報告（データ編）

今後はより具体的な事例を検討するため、実際に女性教師へ聞き取りを行い、調査を進めていく予定である。

### 参考文献

田村宗英 [2023]

「令和4・5年度 仏教とジェンダー研究会 報告『女性教師全数アンケート』実施の経緯と中間報告」『現代密教』33 pp.137-143

真言宗智山派 [2023]

『令和3年度実施真言宗智山派総合調査分析研究報告書 真言宗智山派の現状と課題』真言宗智山派宗務庁

### 註

- (1) 今回のアンケートでは設問のいくつかに「その他」という選択肢を設け、その内容について記述して回答するという形式を採用しているが、それらの回答についてすべてを掲載することはやはり紙幅の制約上不可能である。よって本稿ではそれらの記述回答のうち、主だったものを取り上げて紹介する。
- (2) この問題については田村2023 pp.140-141を参照。
- (3) たとえば最初の設問である「教区」について無回答12人を除けば茨城第一教区の「6人」が最多であるが、他教区にも「3人」や「4人」という結果が出ている。そのため、このようにわずかな差では有意差とは言えず、この結果に基づき「茨城第一教区は女性教師が多い点の特徴」と見ることは適切ではない。
- (4) なお男性教師の学処については最多が「大正大学」42.4%で、それに続いて「専修学院」35.2%となっており女性教師と比べて両者の立場が逆転している。
- (5) これについては次の問2-A.で「10. 他寺職員」という選択肢を設けたが、上記2人のどちらもこの選択肢を選んでいないため、この選択肢は0という結果になっている。
- (6) 実際の設問と回答の選択肢は「あなたは練行を履修しましたか」「はい／いいえ」であるが、女性教師の回答と比較するため便宜上、女性教師と文言を揃えた。